

忘れものは…

白井啓治

毎年のことであるが、年の暮れになると新しい年を迎えるための心の準備ではないが、今年に忘れ物をしてはいないか振り返ってみることにしている。

年頭に特別計を図るわけではないので、行き当たりばつたりの思いつき事ばかりなのだが、中には、その年に置き忘れたくないというものがあるからだ。

しかし、毎年のことではあるが、果たせたこととの何と僅かしかないと呆れ返ってしまった。大層なことを思ったり、考えたりしたわけではないのだけれど、やり残しというよりはやれなかったことが実に多く、これも例年のことではあるが、来年こそはと思い、それらを大風呂敷にくるみ肩に担いで翌年を迎えるのである。

歳をとると背は縮み、腰は曲がるというが、それは老化現象の所為なのかというと、必ずしもそればかりとはいえない気がする。年を重ねるに捨てないで担ぎ歩いているものが多くなってくるのだから、その重さも尋常なものではない筈である。加齢とともに背が縮み、腰が曲がるのは、大風呂敷に担ぐやり残しの重さの所為だと、としみじみ思ってしまった。

それで、昨年末にはこう考えた。大風呂敷を背負って歩くのはもうやめようと。小さな風呂敷に入るものだけにして、今年は猫背を直し、腰を伸ばして歩こうと。

今頃になって、この歳になって捨てるものは捨てなければいけない、何てことに気付くのは遅すぎると言えば遅すぎるのであるが、まだまだ四十歳代の一番激しく仕事をこなしていた時の感覚を捨てきれず、あれもこれもと欲張っている自分が哀れに思えたのであった。

歳相応に、体力相応にということがいわれる。その通りであろう。実際、体力は年々衰えていることを実感させられる。

しかし、歳相応にということ考えた時、体力の衰えに反比例するかのように、脳内に発生する活発な欲の発想は一体どうなっているのだろうか。食欲な働きをみせる脳ミソに気付き、驚きを感じる。

確かに物忘れは年々大きくなっていくようである。だが欲求の肥大に伴って湧き起こってくる発想の量が若いとき以上に多くなってくることを思うと、過去の物忘れは止むを得ないことではないだろうか。

人間の脳は、自分自身が三世代に生きたとしても使い切れないほどのキャパシティーがある

といわれている。その所為かどうかはわからないが、自分の人生の対岸が見えてくると、本能的に全部使い切つて終わりたいと思つてしまう欲求が生まれるのだろうか。まさに風前の灯火にも思える強欲のもとに、発想の次々に湧き起こることに少しばかり脅威を感じてしまう。

こうなるとその年にやり残した事、やれなかった事などを大風呂敷に包み込んで翌年に持ち歩くことなどとうてい出来よう筈はない。もう去年までのことは全部捨てて、新たに思いついた発想にだけ対応するようにしなければ、自身に押しつぶされて悔いを残す人生になってしまう。

そして、除夜の鐘がなり終わったとき、今年からは自分にとつて一番やりたい事だけを、一つだけやろう、そう決心したのである。それで頭の中に散満している諸々の背負いものを全部捨てて空っぽにし、脳みそをジャブジャブ水洗いしたのである。そして今年、自分が一番やりたい事、やらなければならぬ事は何かを改めて考えてみた。

石岡に越してきたのは、霞を食う生活であっても良いから、自分のやりたいことだけをやるための環境を作るためであった。当然のこととていうのも妙であるが、石岡に自分のやりたいことを求める気持ちは全くなかった。自分が霞を食つてもやりたいことしかやらない、という自分自身への既成事実と覚悟が構築できれば、何処ぞに引越しても良いと考えていたのである。

しかし、十年も住んでしまうと、自分の中に霞の食う既成事実と覚悟が出来たからといって、何処ぞに越していくということも出来なくなってしまう。

しかし、幸いなこと、いや幸せなことに、この石岡に居なくては出来ない、自分のやりたいことが見つかったのである。この風の会の愉快な仲間が出来たことよって、私自身の原点であった演劇に戻って表現活動を一からやってみようと思定まったのである。

演劇表現に目覚めさせてくれた直接のきっかけは、現在一緒にことば座という劇団をやっている、聾女優の小林幸枝さんとの出逢いによるものであるが、彼女の稀有な才能を発見し、演劇表現に、自分の最後のやりたいものとして決意させ、後押ししてくれたのが、打田昇さんや兼平ちえこさんといった愉快な仲間であった。

「一人は二人、そして二人は一人」という台詞を軸にして、舟塚山古墳をモチーフにした掌編の戯曲を書いたが、自分勝手に、好きなように生きてやろうと考えても、人の世界に生きていく以上、人と人との繋がりや関係を全く無視して暮らしていくことはできない。その意味では、自分らしく生きようと考えるほど、自分を支え後押ししてくれる愉快な仲間というのは大切である。

脳味噌をジャブジャブ水洗いした後、大事な愉快な仲間だけは忘れ物としないように、仲間達の心を風呂敷にきちんと包み込み、首にくくり付けたのであった。

## ふるさとに吹く風の声

兼平ちえこ

新春のお慶び申し上げます。

昨年はお愛読頂きありがとうございます。今年もどうぞご支援の程よろしくお願いいたします。

・とまつてるよ 小枝に春が

・夢人中 水仙ほのか

それは平成七年のことでした。永住の地を石岡と決め土地を探索中に、以前本紙第三号で紹介しました占いのおばさんの言うことには、主人に向って、

「あなたは、奥さんの実家のある玉造に求めた方が運が開けるよ！ 玉造はこれから、益々拓き発展して行くよ！」

えっッ。山、畑、田、交通不便な田園地帯が…、本当かしら???

それから四年位過ちましたでしょうか。「土浦共同病院の分院が出来るそうだ」と聞かされました。しかも実家から徒歩で五分位の畑の土真中。これには半信半疑。しかし、間もなく建設に入ったのでした。果して予言通りになるのだろうか…。

弘法大師様もおっしゃいました。「信じれば、みな救われる」と。確かに、その後のふるさとの発展は、目を見張るばかり。帰郷する度に賑やかになっていく。

霞ヶ浦湖畔を望む田園に大型スーパーが進出。出島とつなぐ、霞ヶ浦大橋の有料廃止と同時に、たもとの霞ヶ浦ふれあいランド虹の塔を中心と

した道の駅の発展模様。

三年前に見学した時には閑散としており、心配をしたものでした。しかし、昨年十一月には塔内の陳列物も増え、周囲の施設も多くなり、公園遊具も充実し、うらやましくもあり、自慢のふるさとと誇りを感じさせてくれました。

小川の街並みを左にして間もなく、355号線沿いの崩れかけた小高い塚が三味塚古墳。六世紀初頭の古墳で伸展葬の形で遺骸が埋葬されていたという。その他、馬形飾付金銅冠等副葬品が多数発見され、平成の世に後世を担う子供達の学習の場としても見事に復元されていました。

又、平成十六年十一月一日より平成二十年八月三十一日までの解体復元工事中の大場家住宅は、江戸時代歴代にわたり水戸藩の「大山守」を勤めた家柄で初代藩主徳川頼房や二代目光圀、そして九代目斉昭等の領内巡視の折の宿舎兼水戸藩南領の藩政事務として造られたといわれている。現在、一般に公開できるよう（勿論、大場家ご子孫のご負担も多大とか）工事がすすめられています。

そして、もう一つご案内します。

天台宗の祖、最澄の高弟が桓武天皇の勅願によって創建された、国指定重要文化財（二王門と相輪櫓）を持つ西蓮寺。「常陸高野」と呼ばれ、「常行三昧（仏立て）」の法要が九月に行なわれ、近郷近在、遠隔地から新仏の供養に参詣人が訪れ、現在も市が開かれ賑わいを見せているそうです。

遠回りして帰ろう

ランドセル走る

金木犀の道

私は、小学生の頃に「西蓮寺祭り」といって、我家からは五〜六キロの山道を友と連れだつて、市でのお買物の楽しみだけの行事でした。このような歴史の深さ等知るよしもありませんでした。

ふるさとに帰る度に、惜しめない市民の皆さんの協力と力、そして役所の皆さんの力とが大きな成果となつて、古代人からの歴史と文化と心を語り継ごうという隆盛を肌で感じとる事が出来ました。

今年、我が自慢のふるさとに目をむけよう。

〓私のお薦めコース〓

霞ヶ浦大橋の真中に立ち、筑波山を仰ぐ。父なる母なる山、筑波にやさしく抱かれる。

背景は、土浦方面から、石岡、出島方面から、そして潮来方面からと交わる三又沖（みつまたおき）あたり。この三又沖には、常陸国分寺の雄鐘、雌鐘の悲しい物語が伝えられています。

ある夜、大泥棒によつて盗まれ、離ればなれになつた雌鐘は、霞ヶ浦を舟で運ばれる途中嵐で、三又沖に沈んでしまいました。それ以来、三又沖から、明けと暮れになると「国分寺恋しやボ〜ンボン、雄鐘恋しやボ〜ンボン」と鐘の音が聞こえてきたと言います。

「時間」という財産

菅原茂美

人は、なぜこんなにも汗水流して働き続けるのだろうか？

多忙という字は、多くの心を亡くす事であり、大方の人々は、人生の貴重な時間を、常に何かに追いまくられ、汲汲として働き続ける。さて、そのように追いまくられ通しの人生から、いったいどんな『創造』が生まれ得るのであるのか？

せつかく人類に発達した大脳前頭葉には、多くの休養が必要であり、多くの時間をかけなければ、新たな創造は生まれてこない。ニュートンが、ぼけーっとして庭を眺め、カントが毎日欠かさなかつた散歩から、あの不滅の原理や哲理が生まれたのだという。

『頭を冷やして出直して来い』という言葉がある。これは単なる市井の「くまさん・はつたあん」の罵詈雑言ではなく、医学・生理学的にも説明の付く、しっかりした根拠のある言葉である。人間の脳は、ストレスや喧嘩などでカッカしている時は、体温より2℃ぐらい温度が上がり、複雑に絡んだ神経伝達系統が、パニックを起こし、神経細胞間の正しい連絡が出来なくなってしまう。

血液は栄養や体温を全身に配る役目だけではなく、冷却水の役目も果たしている。従つて大脳は水冷エンジンともいえる。いじめや過労などで“うつ状態”の時は冷静な判断はできなくなつており、すぐ自殺に突っ走る。故に周囲は素早くこれを察知し、気を配つて、冷却期間は

即ち「休養」を十分に与えなければならぬ。従つて小中学生が学校や塾の宿題で、寝る時間も削減するなどの詰め込み主義は、ナンセンス極まりない。寝る子は育つという。たつぷりと睡眠を取り、大器晩成型で、将来のために力を溜めておくことこそ肝心。「風光明媚なところ英雄出ずる」も同じ原理と考えられる。

さて、真っ赤に燃えて沈む太陽を、じーっと眺めている犬がいたとしたら、これをただ見過ごしてはいけない。その進化論的延長線上に、人類の『創造』への萌芽の兆しが潜んでいるのかもしれないのだから。

原人から石器・土器・鉄器時代の人々が、じーっと星空を眺め、太陽の位置によつて季節が変わり、そこに農業の原点を見出し、人が集まり都市ができ、商工業が発達して、今日の近代国家が生まれたといえよう。

このように人類は長い時間を掛けて、ゆっくりと文明を築いてきた。しかるに近年の加速度的な物質文明の進展は、子孫の安全な生存圏を脅かし、種の絶滅への特急列車のように見えて仕方がない。

ネアンデルタール原人は、今から三万年前、あたかも彼らのDNAに、種としての寿命がプログラムされているかのごとく、忽然として地上から姿を消してしまった。現世人類と争つたのでもなく、また混血したのでもなく、粛々としてこの世を去つていった。

未来学者は、我々ホモサピエンスの寿命はせいぜい一〇〇万年そこそこと言っている。アフ

リカで盛衰した多くの化石人類や、アジアのジヤワ原人・北京原人などから類推したのである。しかし、人工的な温室効果ガスや、環境破壊物質の加速度的な蓄積が続けば、一万年も危ういともいつている。

人類に知恵と言うものがあるのなら、キチンと歯止めを掛けるべきところはしっかりとかけ、大国のエゴなど決して許してはいけない。そうしなければ、犬どころか、ゴキブリさえも生存できない「無味乾燥な惑星」になってしまう。

私が中米でJICAの獣医の仕事をしていたとき、なんで大の男たちが、日がな一日、揺り椅子で通りを眺めながら、ぼけーっとし続けているのか腑に落ちなかった。あの姿に最初は、働かない奴らに、なぜ日本が莫大な援助をしなければならぬのかと腹が立った。しかし、よく考えてみると、我々は北半球の緯度の高い所に住んでいるからこそ、冬に備え、衣食住をしっかりと整えなければならぬため、蟻の生活が強いられる訳で、熱帯では、衣と住はほとんど、どうでも良い。食は自然界に豊富に存在し、多くの作物は多毛作である。それに彼等には働きたくとも仕事が無いのである。逆に視点を変えて見れば、ぼけーっとして、空(くう)を見つめているあの視線の過去の延長線上に、かの偉大なるマヤ文明やインカ帝国を生み出す創造の原動力があったのかもしれない。

マヤ文明は、白人がやってくる前に滅びてしまったが、インカ帝国は、白人によって持ち込まれた天然痘、黄熱病、マラリア等、更に銃や

馬(南北米大陸には馬はいなかった。西部劇のインディアンは馬は白人が持ち込んだもの)によって、アツというまに滅ぼされてしまった。また、文明は大河の辺に栄えるというのはユーラシア等での常識であって、インディアンの文明は、大きな川などの無い山の上に栄えた。要するに民を支える食料さえ豊なら文明は栄える。トモロコシやジャガイモは勿論だが、彼等にとって最も重要だったのはカカオ(蛋白・脂肪とも各二〇%含有)の実であり、貨幣とし

て流通したという。長い時間をかけて、精緻な天体観測から生まれたマヤやインカの遺跡は、キリスト教伝道時に、野蛮な宗教として徹底的に破壊され、また一部持ち去られたりし、今は見る影もなく本心に心が痛む。文明とは、じっくり時間を掛けて熟成すべきもの。今時の寸秒を争う開発競争が生んだ物質文明など、地球環境汚染物質の山を築くだけで、将来子孫から尊敬される遺産になるとは、到底思われない。

## ギター文化館発

# 常世の国の恋物語百

ことば座2008年定期公演の日程が決まりました。

第 6 回公演	2月17日(日曜日)
第 7 回公演	4月20日(日曜日)
第 8 回公演	6月15日(日曜日)
第 9 回公演	8月17日(日曜日)
第10回公演	10月19日(日曜日)
第11回公演	12月21日(日曜日)

## 2008年「ことば座夢クラブ」年会員募集中!!

平成20年「ことば座夢クラブ」年会員(一万円)を募集しております。会員様には、ギター文化館での定期公演の入場のほか、ことば座主催の公演の割引、年四回発行の季刊紙の送付などの特典があります。

詳しくはことば座事務局

0299 24 2063

fax0299 23 0150

までお問い合わせ下さい。

話は逸れたが、そろそろ私の結論。それは『時間』という財産の有無から言ったら、現在の日本人ほど、世界中で最も貧乏な国民はいないのではなからうか？という事。即ち、愚かな効率主義・競争原理がはびこり、偏差値、ノルマ、占有率、対前年比等という妖怪に追いまくられ、うなされて夜もろくに眠られず、自殺者数のみ鰻登り。これが長年、儒教や仏教に浸たり、国民の識字率は高く、悠久な時の流れの中で、平安文学や多くの芸術を生み出し、世界から尊敬の目で見られていた日本の姿かと思うと、本当に情けなくなってしまう。

人は汗水流してエネルギーを費やし、無機質な高速手段（情報や交通）を得て『時間』という財産を買う。その時間は一体何に使われるのだろうか？ それは思索や創造に向けられるのではなく、次の、より高度のエネルギーや高速手段を得るために費やされ、急速に環境破壊を押し進めている。地球を蹴飛ばし、ほじくり返し、得体の知れぬ物質の山を築き、更に毒薬をたんと撒き散らして、か弱い動物どころか、人類の子孫さえ安心して住めないような始末で、宇宙船地球号の運命やいかにと案ぜられる昨今である。

さて、人生には直線的で、物理的な不可逆性の時間だけでなく、古代インド哲学で言うところの『時間は戻るもの』即ち『円還的な時間』の概念がある。即ち自らの尻尾を飲み込もうとする大蛇の彫像に象徴される『輪廻』の思想である。それはまさしく現代宇宙論で言うところ

の、物質の進化論、即ち星は老化して爆死し、霧散した元素が再び集まり、新たな星の誕生になるという『生々流転（しようじようるてん）』の永遠の繰り返しとする原理と同じである。

永劫回帰の時間の流れの中で、奇しくもこの地球上に生を受け、八〇年という一時を、己の意のままに刻めるのならば、人間社会の作ったストレスの圧力等、取るに足らぬものとして無視し、自分に与えられた『時間という財産』を、より有効に使いたいと念願するものである。

## マラソン

小林幸枝

私がマラソンを始めたきっかけは、先輩から「ホノルルマラソンに参加したい」と言う話を聞かされたことでした。走ることに、運動大好きな私は、直ぐにでもやってみたくなりました。

そのことを話すと、先輩から「だったら先ずつくばマラソンに参加してみない」と誘われ、早速エントリーすることになった。

私は、当然フルマラソンの四二、一九五キロを走るつもりだったのだけれど、先輩から最初は無理しないで先ずは一〇キロに参加した方がよいといわれ、そうしたのでした。

一〇キロに初参加した時の、完走タイムは一時間でしたが、とても物足りなさを感じたのでした。それで翌年は、先輩と一緒にフルマラソンにエントリーしたのでした。

先輩は毎日昼休みにトレーニングをしていた

のでしたが、私はバレーボールをしているから大丈夫と、前回と同様にぶっつけ本番でフルマラソンに挑戦したのでした。

結果は、四時間で完走。体のきつさはなかったのですが、途中で両足に豆が出来、その痛みをゴールまで我慢するのが大変だった。

完走後、シューズを脱いでビックリ仰天。両足にピンポン玉のような水ぶくれの豆が出来ていた。慌てて安全ピンで溜まった水を出してやったのですが、もう靴も履くことが出来ず、大変な思いをした。どうやら、毎日の練習は、体力もさることながら、シューズに足がなれることもあるようです。

先輩は、（怒られるかな？）毎日練習していたのだけれど、制限時間切れの七時間で完走したのでした。

これですっかり自信を持って、ホノルルマラソン、マウイマラソンに参加を決意したのでしたが、日程が合わず断念したのでした。

四年前のこと、サハラマラソンに参加してみたいと、無茶な計画を試みたのですが、参加費用が高くてこれも断念した。サハラマラソンは、灼熱のサハラ砂漠を六ステージ、二三〇キロを走破する世界一過酷な、アドベンチャーマラソンで、水以外の衣食、夜具などをバックパックに背負ってゴールを目指すものです。

私は、近藤さんに見出され朗読舞俳優として舞台表現に将来の夢を紡ぐことになりましたが、元々、体力の限界に挑むような運動が好きで、今年、四月に行なわれる宮古島トライアスロン

ギター文化館  
2008 CONCERT SERIES  
The 15th anniversary

- 1月20日 鈴木大介・鬼怒無月  
デュオ・ギターコンサート
- 1月27日 アンドリュー・ヨーク  
ギターコンサート
- 2月11日 クリスチャン・ラブニェール  
ギターリサイタル
- 3月9日 角圭司(ゲスト尾尻雅弘)  
ギターリサイタル
- 3月23日 クエンカ兄弟  
ギター&ピアノ・デュオ・コンサート
- 4月13日 荘村清志  
ギターリサイタル
- 4月27日 烏力亜娜 古箏の調べ

ギター文化館も開設して今年で15年になります。魅力たっぷりの大型企画で皆様のご来場をお待ちいたしております。

0299 - 46 - 2457 FAX0299 - 46 - 2628

競技に参加したいと思ったりしましたが、定期公演と日程が重なる上、そんなことを言うと、近藤さんに大目玉を貰うに違いありません。私は、頭を空っぽにして、ただひたすらに体力の限界に挑むのが大好き。舞台も相当な体力を必要としますが、それ以上に自分の心をジーツと見続け、自分の表現を構築する執念が要求され、精神的にはトライアスロンやサハラマラソンよりも強靱な精神力が必要です。

近藤さんは、大学に入るときまでオリンピックを目指すアスリートだったそうですが、もしかしたら芸術表現の過酷な執念と、アスリートの自虐的にも思える肉体の酷使はどこか共通するものがあるかもしれないと思ってみたりします。マラソンは、ただひたすら走るといって一見単純なスポーツに思えるけれど、一度それを体験すると魅力に取り憑かれるところがあります。

「ふるさと風の会」会員募集中!!

ふるさと風の会では、ふるさとの歴史・文化の再発見と創造を考える仲間を募集しております。自分達の住む国の暮らしと文化を真面目に表現し、ふるさと自慢をしたいと考える方々の、入会をお待ちしております。

会の集まりは、月初に会報作りを兼ねた懇親会と月一回の勉強会。

入会に関するお問い合わせは、下記会員まで。

白井 啓治 0299 - 24 - 2063 打田 昇三 0299 - 22 - 4400  
兼平 ちえこ 0299 - 26 - 7178 伊東 弓子 0299 - 26 - 1659

ます。無理してオーバーペースになると途中で潰れてしまいます。自分を良く知って、自分自身の心と戦うスポーツです。そうして考えると、舞台表現とマラソンには共通する何かがあるのだらうと思う。

十二月某日「つかれがでて」

- ・いつものまにと庭の木々の色づきに気がついて
- ・紅葉のどのいろがわが人生
- ・問うても無言 夫婦の日の風は冷たく
- ・うなだれてたつきりん草の群
- ・どこまでも走り去る木の葉に心みえる
- ・まあるくなつて芋の袋づめする二人
- ・ひだまりに黒猫と白猫のねそべって

十二月某日「元気もどってきて」

- ・柚子の実豊に人去りし家を飾る
- ・乾いた師走の道に菜の花の咲く
- ・花梨の実の残った木 通る人の足を止めて
- ・道たちきられて長屋門たたずむ影
- ・無条件に抱く 笑う 孫の動きに
- ・牛舎を背にして陽だまりにいくつかの笑顔

十二月某日「無題」

- ・考えたくもない やさしさの裏
- ・からす枝をゆすり びしやげた柿
- ・あえる尾花に問えど答えなし
- ・ひとつに重なりて裾をひくふたつの峰
- ・何度ふりむけど風の音がいくばかり
- ・ふりむけどふりむけど人の影なく
- ・ぐずる子にとくとくと聞かす娘

（新春特別寄稿）

「歴史の里」は何処へ行った

太田尚

一

拝啓 茨城県知事殿

十一月十五日、石岡会場での知事との対話集  
会に参加して、石岡の歴史的文化遺産の保全を  
願って二点お伺いいたしました。

その冒頭でも少し触れましたが、石岡の市街  
の様子ご覧になっていただけましたでしょうか。  
この二〇年来、駅前のレストランの撤退以来、地元  
資本の大型店・金融機関、NTT、石岡精工、  
国営アルコール工場、そして保健所、法務局等  
など旧市街地の目ぼしい施設はほとんど姿を消  
して、八〇余年の歴史を刻んだ鹿島鉄道（鹿島  
参宮鉄道）の廃線に到りました。

如何に石岡市が活気のない魅力に乏しい街に  
なってしまったか、公定地価の評価でも常磐線  
沿線の都市で北方の高萩市や北茨城市よりも低  
い評価になっております。

この様な視点からも、石岡に残されたものと  
して古墳や古代の役所・寺院遺跡などの先人に  
よる歴史的文化遺産（以下文化財）があります。  
しかも、水戸市や土浦市はじめ県内どこにもな  
い、古代の国（常陸国）レベルの史跡・遺跡の  
数々が存在しております。

かつて県が「歴史の里」に選定したいきさつ  
にも

本県の特性を代表する文化財が多く所在す  
る石岡市を「歴史の里」とし、云々

とあり、

国にあっても、茨城県最初の国指定史跡に、  
東日本第二位の規模をもつ前方後円墳舟塚山古  
墳を指定し、県内三カ所の特別史跡のうち国分  
寺・国分尼寺跡の二カ所を指定して、石岡に存  
在する文化財の存在価値を認めているのです。

まさに、国・県ともに文化財を活用した「ま  
ち創り」を示唆されているのです。

ただ残念なのは、この他所に勝れたかけがえ  
のない文化財の重要性・存在価値を認識しなが  
ら、活用し得なかったのが、ほかならぬ石岡市  
民であり歴代の為政者であったのです。

かつて、元茨城県文化財保護審議会委員を長  
年つとめられた友人の一人が、

県内のどこにも類のない歴史的遺産、これ  
を現代に活用せずして他にどの様な町づく  
りの手法があるのか、知識を知恵に変えて  
いく心構えがない、云々

（常総の歴史）3号、一九八九年一月）  
と指摘されて、当時から石岡市を常陸国府市と  
改称することを提言されていきました。

こうした事情を有する石岡市域で開削・造成  
されようとしている新国道の最深8m掘り下げ  
る切り通し道によって、国指定などの高レベル  
の文化財（舟塚山古墳・愛宕山古墳と茨城郡衙・  
郡衙周辺寺院・石岡城跡等）が分断され、その  
景観が破壊されようとしているのです。加えて、  
先に保全を提言しました新国道の路線上の二つ  
の高レベルの可能性のある遺跡、





としての価値ある重要遺跡の分断・破壊は是非とも見直していただかねばなりません。

最近のテレビによる情報では、高速道路の料金を無料にしたとのことですから、いずれ常磐自動車道なども対象になるでしょうし、無料にならなくとも格安な料金になれば、6号国道を利用する車両の八〇％といわれる通過車両はこれを利用し6号国道の渋滞も解消され、新たなバイパスは必要なくなり、遺跡や環境が保全されて、無駄金を使うこともなくなるのは明白です。

知事殿のご決断を念願するものです。 敬具  
平成十九（二〇〇七）年十一月

## 新春特集

欠片（かけら）有り

打田昇三

ルーブル美術館の古代オリエント文明コーナーには最も古い時期の彩文土器が多数展示してある。メソポタミア北部で土器などが出土した代表的遺跡「ハッスーナ」「ハラフ」「ウバイド」などの地名で呼ばれる「土器を伴う後期新石器時代」の貴重な文化財である。特に有名なものに「植物文様のなかの豹」と命名された盃形の壺がある。高さが30センチ、直系35センチぐらいのもので紀元前四千年期、つまり約

六千年前に制作された最高の芸術品だと言われている。大雑把な時代感覚の六千年前は、エジプトでも初めてナイル河流域の農耕が行われた頃であるし、メソポタミア南部では「最古の都市文明を興した」とされるシュメール人が、正にその原形を造ろうとしていた時代である。

「植物文様のなかの豹」（壺）の出土地はイラン中央部、古代シルクロードが北端を通るキヤビール砂漠南西部の「テペ・シアルク遺跡」で首都のテヘランからは200キロほど離れたカーシャーンというオアシス都市の近郊にある。1933年から5年程かけてR・ギルシュマン博士らフランス調査団が発掘したようだが、六千年も経ってから掘り出されたのだから当然、丸ごとではない。幾つもの欠片になってバラバラに散っていたものを学者の先生たちが拾い集めて付き合わせながら、ようやく壺の形にしたので何ヶ所かの欠損部分がある。そこには粘土を詰めてあるから、原形は表しているが見た目は汚らしい。

この壺が注目されたのは、上部縁周り（四分の一ほど）に、フランスの新印象主義美術を代表し「ポーズする女たち」「サーカスの客寄せ」などの作品で知られた（私は知らないが）スーラという画家が考案したという「点描法」という手法で豹の絵が描かれていることらしい。豹だと言われれば豹に見えないこともないが黙って見せられたら「野良猫の干物」とでも答えるしかない稚拙な点描の絵模様である。六千年も前のことだから歴史的文明的に凄いのである。

豹の行進する台地が網目で表現された下方には舟らしき模様、漁具か農機具のような菱形模様と巻き葉を付けた大枝、泳ぐ鴨（写真では裏面？）などが描かれており底近くは無模様である。私がこの壺の存在を知ったのはNHKが昭和60年に発行した「ルーブル美術館」全七巻の写真集である。その前年にルーブルへも入館しているから現物を見たかも知れないが、その当時は名画に見とれていたから、壊れた壺など見向きもしなかったと思う。

イラン（正式国名はイラン・イスラム共和国）は1980年9月22日に隣国のイラクと戦争を始めた。同じイスラム国家でもイランとイラクは水と油ほどの違いがある上に、歴史的な怨念が重なっているから黒白は論じられないが双方の石油施設等に多大の損害を出し停戦が決まったのは1988年である。イランには「閻魔（えんま）大王が悪魔に命じて工事をさせた」という伝説を持つ「ペルセポリス大宮殿」を始め、黄金都市「メデアア王国」の遺跡、イランの京都と称えられ世界の半分と自慢する「イスファハン市街」、拝火教の風習と伝統の火が残る都市「ヤズド」などなど、観光施設には事欠かないから各国の旅行会社はイラン国民よりも終戦を待ち望んでいた。停戦の翌年、物好きで知られるイタリヤ人が観光団を組織して戦火の燻るイランへ出かけたようだ。その一週間後にイタリヤ人と同じくらいに“お調子者”の日本観光団二十名が成田を発ち北京経由でテヘランへ飛んだ。勿論、日本では最初、世界でも二番

目である。客の半分は各旅行会社の偵察社員らしく思えた。

イラン観光の目玉は「古代オリエント文明の最後の輝き」と言われた「ペルセポリス宮殿」であり、紀元前514年からアケメネス王朝のダリウス大王とクセルクス一世が莫大な費用をかけて築き上げ、それを紀元前330年に、かのアレキサンダー大王が壊したという曰くつきの遺跡である。ペルシア帝国の権威の象徴とも言えるペルセポリスの破壊は故意か過失か、学説が分かれているようであるが、私はもつと単純な原因であろうと思っている。

その頃の世界でギリシア人からも田舎者と馬鹿にされていた小国・マケドニアの王だったアレキサンダーが、世界最強の国と自負していた現在の〇〇〇合衆国のようなペルシア帝国をアッサリと倒して首都を占領したのだから嬉しくてしょうがない。同伴していたタイスという名前の芸者さんだかホステスさんだか、一緒に祝杯を挙げていた御姐さんが松明(たいまつ)を持ってフラフラと歩き出した。アレキサンダーも真似をしてふざけているうちに松明の火が壁に燃え移った。石で組み上げた宮殿ではあるが内部にレバノンの杉の板が貼られており、乾燥した半砂漠地帯だから火の手は早い。慌てたアレキサンダーが焼酎だかワインだか壺の中の液体で消火しようとしたけれどアルコールだから消えることはなくて大伽藍は忽ち焼け落ちてしまった。以来、二千年間も廢墟は砂漠に埋もれていたのである。

首都のテヘランからペルセポリスへはペルシア湾岸に寄ったシラーズという標高一六〇〇メートルの高原都市まで航空便で南下すれば早い。ところが別の見所であるイラン発祥の地・メディア王国遺跡を回り、イラク国境近くのクルド人の町にあるササン朝ペルシア時代の石彫りを見るためには、テヘランからシルクロードを西に向かつて500キロほど走らなければならぬ、ということの世界の名車フォルクスワーゲンが登場してきた。往きはペルセポリスまでバスの旅になるらしく、距離を聞いたら2000キロを6日間で走るのだと言われたが、それはバスが順調に動けばの話であった。

「老いては麒麟も驚馬に劣る」と言う。前面に大きなワーゲンのマークを付けたバスは厚化粧でかなりのご高齢に見えた。これで砂漠の道を走れるのか？我々の心配が通じたと見えて、運転手が自信有り気にタイヤを指さし「メードインジャパン・グッド」だと言った。ワーゲンは飾りだけか？：それまでは気にも留めなかったタイヤを見て驚いた。日本ならとうに捨てている「山も谷も無い」ツルツルのタイヤが、これから2000キロも走らされる運命を嘆いていたのである。「幾らジャパンでも無理である」そう思っても意見は言えない乗客は、改めて敗戦国の観光に飛びついた愚かさを反省するばかりである。

戦火は収まったと言うが爆撃で壊されたモスク、住宅、ビルなどは直しようもなく、半砂漠地帯の激戦地跡には鳥籠を伏せたような戦死

者の墓が延々と新造されていて、住民たちは「イラク軍の非道」を訴えていたから不利な戦いだったと想像できる。国境に近い地域の工場前には塹壕が掘られ、高射機関砲がイラクの空に向いていた。戦後にしては治安が良いのは政府がイスラムの戒律を前面に出して統治していたからで、その分、取締りも厳しく、軍と警察が競うように検問を繰り返していた。そして山も谷も無いタイヤで砂漠と山と谷を越えて疾走(ではなく失走)する老朽バスは期待に込めてエンジン、バッテリー、ドア、タイヤなどの持病発作で場所を選ばずに倒れた。

需要と供給の関係と言うか、以心伝心と言うか、バスが故障する度に近くの集落に修理屋さんが居て手際よく直し、時間は遅れても何事も無かったように旅は続けられる。故障する場所が市街地ということはなく、半砂漠地帯が多いから「ここで暫く待っていて！」とバスから下ろされた乗客たちは、愚痴を言いながらも其処で待つほかは無い。「蠍(さそり)は小さいから毒は少ないが、蛇の毒は殺傷能力を持っている」と言われ、さらに「昔はこの辺りにもライオンが棲息していた」という親切な説明を聞いて動き回る者はいない。

5日目の宿泊地が最初に述べた「カーシャーン」というオアシス都市である。イランは国土の大部分が高原地帯であり、ペルシア湾岸に沿うような形で幾つもの山脈が通っているから砂漠は多いがアフリカと違って水脈も隠れている。かつての王朝時代には水脈を利用した「カナ-

ト」と呼ばれる連結井戸を掘り半砂漠地帯で農業も行われていた。ところが西暦1200年代から1500年にかけて、イランはモンゴルの侵略を受け、先人が苦勞して築いた地下農業水路などを徹底的に破壊されてしまった。水脈の絶えた砂漠は砂漠でしかない。砂漠の民は水何よりも貴重とする。人口三十万程のカーシャーン市は街中に小川が流れ、何ヶ所も泉が湧き、記念施設には大きな池が造られ緑豊かで公園などの多い、正に砂漠の国のユートピア都市である。

カーシャーン市の名所は「フィンガーデン（首相の庭）」と呼ばれる庭園施設であるが此処はイランで最初に大学を創設し留学制度を取り入れるなど文教政策に実績を残したアミルカビール宰相（イスラム教シーア派を国教としたペルシア人王朝・サファビー朝の首相）の邸宅跡である。首相も人間だから、あれこれと失敗をする人も多いが、一五〇〇年代に起こしたアミルカビール首相の失敗は日本の総理大臣が束になつてかかっても勝てないほどユニークである。もし大きな失敗を仕出かした大臣がいたら、アミルカビールさんの例を引き合いに出して野党の追及をかわしたほうが良い。

首相の上には王様が居た。王様も飾りで居るうちは呑気だが幾らかでもヤル気を出すと、仕事の出来る首相が目障りになつてくる。有能なアミルカビールは次々と政策を立案しては王様に示し、王様が考えている間に実施してしまうから国民にしてみれば首相が君主に見えてくる。

そこで国王は宰相のアミルカビール排斥を決意した。王様は日本の国会議員のように「不信任決議案」を簡単には出せないし「君はクビだ！」と言いたくても欠点が無いのだから困る。そこで腹心に命じて首相の許に使者を立て「首相の暗殺命令書」を見せて同意のサインをとらせた。使者が来たときアミルカビールはビールでも飲んでからゆつくりと入浴していた。差し出された書類を見ることは見たのだが、酔眼朦朧としている上に、どうせ王様の考え出すことなど子どもの遊び同然に思つて簡単にサインしてしまつた。暗殺命令書に殺される本人の承諾サインがあり、手続きは万全で、王様はすぐに刺客を送り首相を暗殺した。その場所が現在のフィンガーデンであるらしい。泊つたホテルの名も「アミルカビール」:

砂漠の民ならば噴水・池・小川・プール・湧き水などを見れば感激するであろうが、水に恵まれた日本人がポンコツバスで砂漠を越えてやつとオアシス都市まで来たのに、見学できたのが「殺人現場」だけとは納得がいかない。その気配を感じとつたのかどうか、翌朝はシルキー山脈に添つて山道を行くので早めにホテルを出たバスが、街道を外れて畑の道へ入り込んだ。特別に古代の遺跡を見学するという。しかし運転手、整備員、案内人、旅行代理店員と四人のイラン人がいたのだがどうしても道が分からな。そのうちにバイクに乗つた警察官がやって来た。「駄目だ！」と言われるものと思つていたら、警察官が先導して到着したのが丘とも原野

ともつかない荒れ果てた岩の台地である。

警官を交えて五人のイラン人が協議し、日本人の添乗員が伝えてくれたのは「ここは遺跡だが、戦争で予算がなく整備が疎かになっている。間も無く政府も保存のために再調査をする予定であるが、今の所はこのとおり荒れているから中に入つて勝手に行動して宜しい」という趣旨の言葉だった。部分的に素焼きレンガの塀や雑木林に囲まれた凹凸の激しい場所内には、登ることが出来ないような岩山や、石ころ、レンガ、土器などの破片が一面に散らばつた傾斜地が展開しており、見ると言つても特に感動する光景でもないから一同は申し合わせたように、珍しい形の石や土器の欠片を何個か拾つて満足したのである。日本の縄文土器に良く似た欠片を拾つた者もいる。

私は、岩の中腹にやつと登つて行けるような洞窟を発見して入り込み、途中で拾つた木の枝で堆積した土埃の中をかき回していた。その時に他の土器とは違って素焼きに黒い模様のある土器片を見つけた。大きさは4×4×4×2センチ程度、厚さ1センチぐらいの破片であるが、模様の書かれたものを見つけたのは私だけだったから「許された盗掘の成功」を喜んでいたのだが、この土器の破片の由緒などは知るすべもなかった。

イラン・イラクの停戦に合わせたように、日本では「シルクロード大文明展」が奈良で開かれた。当時は勤務の都合もあったので見学はそこそこにして年表と歴史図、展示品のカタログ

を買い、宅急便で送って貰った。その中の「オアシスと草原の道・編」にイラクから出品された紀元前三千年期の彩文壺の写真があり、出土地はテイグリス川上流「ニネベ付近」とされていた。その壺が風合いといい土器の色といい、私がイランの遺跡から拾ってきた柄付きの土器片に似ているから、紀元前三千年期にメソポタミア高原に展開していたシュメール人の文化の影響がイラン高原にも達していたのかと勝手に決めていた。

一方、NHKは「ルーブル美術館」の写真集を昭和60年(1985)に出版したあと、5年後には「大英博物館」の写真集を出している。

これにより先進国に持ちだされたメソポタミア文明の主要な出土品の情報は断片的ながらも知ることが出来るようになった。写真集を見直した私は冒頭で述べたように「ルーブル美術館」第一集「文明の曙光」九十四ページ一面に掲載された「植物文様のなかの豹」の写真を知り、そして驚いた。壺の欠損部分の模様が、イランのテペ・シアルク遺跡から拾ってきた模様付きの土器破片と同じではないか…

私は、次に示す理由により、持っている破片が「植物文様のなかの豹」(壺)の欠損部分の一部だと確信するに至った。

①破片を拾った場所がイランの現地警察官が案内してくれた「テペ・シアルク遺跡」構内の洞窟であること。「植物文様のなかの豹」の出土地)

②ルーブル美術館にある「植物文様のなかの豹」

の図柄部分に欠損箇所があり、

その一つは渦巻き模様で巻き葉の大枝を表しているときれるが、破片の図柄には、その渦巻き模様がある。

③六千年も前だから、壺が大量生産される筈がなく、一つ一つの手造りで同じ文様が幾つもあることは無い。

④遺跡の調査発掘が行われたのが十八世紀ぐらいであろうから、壺もバラバラの状態で見つかったもので、欠損部分が現地に残っている可能性はある。

⑤あのような場所に、わざわざ偽物の破片を造って撒いておく暇人がいるとは考えられないから、偽物ではない。

⑥破片の図柄はもとより、絵の色彩、壺の素地の色などが酷似している。

(①～⑥は真実である。)

平成12年(2000)、NHKは放送75周年を記念する事業として約五か月間に亘り「世界四大文明展」を東京、横浜の四会場で開催した。8月6日には渋谷のNHKホールで「世界四大文明フォーラム」“文明の潮流 その未来～四大文明に何を学ぶのか”と題して名誉総裁・三笠宮の特別講演や、パネルディスカッションが行われた。パネリストは早稲田大学の吉村作治教授(エジプト文明展ゲスト)、後藤健東京国立博物館西アジア・エジプト室長(エジプト文明展監修者)、松本健国士館大学教授(メソポタミア文明監修者)、近藤英夫東海大学教授(インダス文明展監修者)、鶴間和幸学習院大学

教授(中国文明展監修者)、コーディネーターが高島肇久NHK放送総局特別主幹(いずれも当時)という顔ぶれで森田美由紀アナウンサーが司会をした。私は8月6日のフォーラムには出席してメモをとり、18日に放映された際には録音してから自分で全文の筆記録を作って持っている。

文明展は「エジプト(東京国立博物館)」「メソポタミア(世田谷美術館)」「インダス(東京都美術館)」「中国(横浜美術館)」に会場が分かれていたから上野でエジプト展だけを見て、その代り「世界四大文明展」全部のカタログだけは入手しておいた。その「メソポタミア文明編」には「植物文様のなかの豹」(壺)の写真も載っていたから日本でも展示されたのだと思われる。さて、そうなるかと余計なことだが世界の文化遺産でもある「壺」の欠損部分に無造作に詰められた粘土が気になって仕方が無い。

イランから拾ってきた土器の破片が、もし壺の欠損部分であるならば少しでも埋めて貰いたい。田舎の爺さんがメソポタミア文明の土器の破片を持っていても無意味である。そう思って、事情を手紙で説明し必要なら差し上げるからと写真添えて世田谷美術館へ連絡した。数日経ってから、世田谷美術館(メソポタミア文明展会場)から電話があった。若い男性の声だったから会場に詰めている学生でもあったろうか、言葉の様子だと頭から偽物扱いをしている。写真を送っているのだから、会場にある「植物文様のなかの豹」(壺)の欠損部分と見比べてみれ

ば分かる筈だが、それさえ試みた様子は無い。つまり、テレビの「なんとか鑑定団」の感覚で有名な展示品について何か言ってくる話は頭から偽物だと決め付けている。

尤も、壺はルーブル美術館から借りたものだし、日本の所有にはならないから愛国心で話に乗らなかったとしたら立派な心がけかも知れない。よく考えたらフランスが持っている、出たところはイランだから所有権は何処の国か？ フォーラムでは、古代文明も従来の捉え方では済まされない問題が多発していることが話題になった。一つには環境破壊の問題もある。驚いたことにメソポタミア文明で、かなり早い時期から小麦の生産が低下し、その原因が急激な都市化による水不足・塩害（大陸では岩塩の影響）にありとしている。

古代文明の滅亡の原因が、人間の精神的なものと科学的なものとのバランスの喪失にあったとする各パネラーの意見でフォーラムが結論づけられたことは一市民としても反省させられる。だからこそ、遺跡から出た土器の破片でも本来付くべき場所に収まって貰いたいのである。将来、イランがオリエント文明の価値に気づいてフランスから「植物文様のなかの豹」（壺）を取り返すことがあったら、私は曲線模様の描かれた破片をお返しするつもりでいる。現在のイランは国際的に評判が良くないが、壺の破片を拾った旅で私は、知らないイランの小父さんに大層なお世話になった恩義があるからである。

ワーゲンのマークを付け日本の古タイヤを

履いたポロバスはハマダンという中核都市に到着した。古代からシルクロードの要衝でイラン屈指の旧都でもあるハマダンは高原部にあり標高四千メートル級の山々を背にして一五〇〇メートルの台地上に広がり古くはエクバターナと呼ばれていた。ペルシア帝国時代には「夏の都」として栄えた文化都市で、中世アラビア最高の哲学者であり医者であったイブンシーナは此処に眠っている。この人が著した「医学正典」という本が十七世紀まで中世ヨーロッパ医学書の規準だったというから偉大な人物である。市内

の霊廟には銅像が建てられている。しかし、この街は何度もイラク軍の空爆に遭って大きな被害を受け、復旧は未だであった。ハマダンには、日本の「古事記」のようなイラン建国の歴史を伝える「神話が残っている。元来、イランは「ペルシア」が歴史的な名称である。紀元前二千年頃、黒海、カスピ海、アラル海などの北方台地から南下してきた民族があり「アーリア人」と言った。「アーリア」は「高貴な」と言う意味だそうで他人の土地を侵略するのに誠に厚かましい名前ではある。多くは印

## ことば座「風の塾」絵と一行文教室

ふるさとの風を、大切な言葉や色に表現してみませんか

講師：兼平ちえこ・白井啓治

言葉とは、心を口に茂らせること。心とは真実。口とは真実を表現する全ての手段のこと。

ふるさとの風を色に刷いて、暮らしの中の発見を一行の言葉に落とす。一切の形式を忘れ、表現の基本である「自由自在」を大切に考え、筆の遊びを楽しむ教室です。絵の講師、兼平ちえこは、ふるさと風の会会員で、ことば座の舞台装飾を担当しています。

絵や文に抱いている固定観念を取り払って、自分を楽しむことに一生懸命の教室には、何時も笑いが絶えません。「老いても青春」を主張し、「常世の国の恋物語百」に挑戦する脚本家：白井啓治の「ちゃんと恋をしてる？」の話の下、箸が転んでも可笑しい青春を絵と言葉の中に再発見し、自分自身を褒め、楽しむ教室です。

教室は、毎月第一、第三金曜日、勤労青少年ホームにて午後一時半～三時半まで開いています。見学、体験は何時でもご自由におこし下さい。教室の詳しいお問い合わせは下記連絡先まで。

兼平ちえこ 0299-26-7178

白井 啓治 0299-24-2063

度に侵入して先住のドラビタ人などを征服した。この集団のうち、カスピ海東部から西北印度に進んだ一団は、現地先住民の頑強な抵抗に遭って止む無くイラン高原に留まることになった。ところがイラン高原にも先に入り込んでいた民族がいた。

ギリシアの歴史家ヘロドトスなどの説によれば、この「先に来ていた民族」は水と緑に恵まれたイラン西部に落ち着いたため農業と牧畜により豊かな生活が出来て、さらには先進国のアッシリアから文化を吸収していたという。この民族は「メディア」と呼ばれるが、イラン人は同系と見なされている。紀元前十三世紀頃からメソポタミアに一大帝国を築いたアッシリアが暴虐と圧政と内紛が原因で衰退を始めた紀元前七世紀、それまで飼い犬のように従属していたメディアはアッシリアに侵入してこれを滅亡させた。メディアは首都をエクバターンに置いていたが、メソポタミアに居た新バビロニア王国も滅びたのでその跡地にメディア王国の首都を遷すことにした。

一方「後から来た民族」は「ファールス（パルス）」と呼ばれる資源に恵まれないイラン西北部山岳地帯に住むしかなく、先輩のメディアの顔色を窺いながら属国同然の立場に甘んじていた。首都移転の頃のメディア国王はアステュアゲス王と言った。疑い深く物事を気にするタイプの人物で神官の占いを重視して政策を決めていた。この王に名をマンダネと言う年頃の王女

が居た。

首都移転に伴う政務で多忙な王は、或る夜に不思議なと言うより奇妙な夢を見た。ことも有るうに王女マンダネがベッドで寝小便をして、その小便が宮殿から溢れ、アジア全土を水浸しにしたのである。勿論、夢だから宮殿内も濡れてはいないし、マンダネを呼び寄せてもスッキリした顔をしている。それでも気になる王は神官を呼び夢の内容を占わせた。神官は神妙な顔でクダライ占いをしてから、王に人払いを請い「恐れながら王女様をなるべく遠くに離されますように」と進言した。「王女を何処かの国に嫁がせるほかはあるまい」と都合良く、同系民族で属国のファールスには独身で年頃の族長カンビュセスが居た。早速、メディア王国から王女マンダネを嫁がせるという命令が来て新郎新婦は見合い写真を見る暇も無く結婚させられてしまった。アステュアゲス王は安心してメディアの首都をティグリス河上流のニネブエに遷した。

身に覚えのない「寝小便」の罪で僻地に嫁がされたマンダネは、それでも結婚後ほどなく懐妊した。目出度い知らせはニネブエへも届いたが、アステュアゲス王は再び怪しい夢を見た。出産前のマンダネの下半身から葡萄が生えて蔓が延び、アジアに広がるというのである。呼ばれた神官は「勝手にしやがれ！」と思いつつも神妙に「急いで（出産前に）王女様を呼び寄せ、生まれた子が男児ならば命を絶つように」と占った。かくしてマンダネは国王の許に呼び寄せ

られ新王宮で運命の出産を迎えることになった。生まれたのは男児であった。

「生まれる子が女兒なら助け、男児なら生かさず」というのは、良く聞く話である。昔から男系相続の問題点だったのであろう。この場合は、気が利いた家臣（恐らくマンダネに従ってきたファールスの家臣）が密かに赤子を抱いて王宮を脱出し、カンビュセスの許へ届けた。この男児はキュロスと名付けられて、ファールスを強国にし、メディアを滅ぼし、イラン、メソポタミア、シリア、トルコなどを支配するペル

## 打田昇三歴史エッセイ

### ふるさと「風にたずねて」( )

- 小紙に毎月連載されている打田昇三氏の「ふるさと歴史探訪」が二冊の小冊子にまとめられて、ふるさと風の文庫として発売することになりました。(二冊組：1000円)
- 小さな手作りの文庫本ですが、風の会のふるさとを思う心が一杯の本です。
- 冊子は、ギター文化館、中町商店街カフェ・キーボーにて販売しています。

ふるさと風の会事務局 0299-24-2063(白井)

シア帝国建国の基礎を築くことになる。イランを「ペルシア」と言うのは民族創設の地「ファールス（パルス）」に由来しているのだが、キュロス大王の死後にペルシア帝国は混乱し傍系から押し上がったダリウス大王が権力を握る。ペルセポリスを建てたのはダリウス大王である。アケメネス王朝ペルシア帝国はダリウス大王の後継者たちにより世界帝国に発展する。しかし、クセルクセス一世、二世らのギリシア遠征が遠因となってギリシアの辺境に生まれた小国の王アレキサンダーが、忘れた頃に復讐心を燃やしてペルシア（イラン）を滅ぼしたと言われる。因果な話ではある。

恥かしい伝説を持つ王女マンダネが育ったメディア王国の最初の首都エクバターンは、旧市街に在った宮殿が七色七重の城壁で囲まれていたという説が近年に浮上してきたのである。イラン政府も乗り気になって少しずつ発掘調査を進めるといので、ハマダンに到着した私たちは、かつての王宮が建てられていた辺りを見ることになった。ところが、遺跡としては岩山と崩れかけた土塁が残るだけで、結局はバスで一回りしただけで終わった。

イラン観光の最大目的はペルセポリスだが、ペルシア帝国創設に関わる神話が残る場所となれば、日本では「出雲」か「筑紫」に相当する。折角、其処まで来てバスで一巡とは勿体無い。イラン人のガイドなどは、イラク空軍に爆撃されたシーア派の教会などを見せて「こんなに壊

された！」ことを強調しているが、日本も第二次世界大戦でアメ公に国中を破壊されている。それやこれやで夕方になり観光は打ち切られた。「メディア王国の遺跡をもう一度見て金の塊は無理でも城壁の小石でも拾っておきたい！」幸いに宿泊するホテルは遺跡からそれ程遠くないしかも大通りを数回曲がるだけで分かり易い場所にある。

バスの中から良く観察して順路と目印を頭に叩き込んだ私は、夜明けを待ち兼ねてホテルを抜け出した。示された朝食時間は遅かったから、それまでにはゆっくりと目的が達成できる。寒い朝だが小走りに行けば身体は温かい。計算どおりにメディア遺跡に辿り着き、自分なりに古代ペルシアのイメージを拵えて帰路について。この角を曲がって…二十分程歩いた頃に途中の光景が違っていることに気づいた。「曲がる角を間違えた？」戻るか、逆に曲がるか、頭の中に描いた略図がずっと消えてしまった。「さて困った！」

夜明けの街には日本と同じように朝の早い新聞店が店開きして居るようだが…言葉が通じない。その近くで、焚き火にあたっている中年の小父さんがいた。

「サラム…」殆どのイスラム圏はアラビア語だがイランはペルシア語である。アラビア語の「おはよう」は長いのだがペルシア語は「サラム」で済む。小父さんが振り向いてくれた。「道を教えてください」と言うべきだが、思い出せないから適当な方角を指さして「ボウアリホテル？」

と聞くそぶりを示す。小父さんは親切に新聞販売店に入って、店の人に確認している様子だった。辺りは未だ薄暗い。イスラムの街は普段と変わらないがその日は元旦である。

ホテルの所在地を確認したらしい小父さんが出てきた。日本円で千円ほどを小父さんに渡し「私をボウアリホテルに連れて行って…」と日本語で頼んだ。親切なイランの小父さんは寒い夜明けのハマダン市内を十五分ほど歩いて迷子の私をホテル前まで案内してくれたのである。

途中で小父さんがペルシア語で何か言い、言葉の意味が分からない私は日本語で適当な返事をする。奇妙な道行きではあったが「モタシヤケラム（アラビア語ではシヨ克蘭）——有難う」ホテルに着いた時には、同行の人たちがそろそろ起き出す時間だった。私は改めて小父さんにお礼をし、何食わぬ様子で部屋に戻ったのである。

あの時、小父さんは新聞配達の前に焚き火で身体を暖めていたのかも知れず私に付き合ってくれた時間だけ配達が遅れたのではないか？迷惑をかけたお詫びの意味でも、私は自分が拾ってきた土器の欠片が「イランから出た貴重な古代文明の証拠品」であることを強調したいのである。

## 我が昼食処（ふらの）

近藤治平

ことば座の稽古で、ギター文化館に月に何度

かでかけるのであるが、午前中の稽古の時は何時も近くのレストラン「ふらの」で昼食をとる。石岡では珍しく美味しいパスタを食べさせてくれるお店である。

食い意地が張っている所為で、食べ物で嫌いなものはない。美食家というわけではないが、不味いものを出されると金を払うのも嫌になるばかりでなく、時間を返せと怒鳴りたくなる。美味いか不味いかは、個人差があるが、味に創造性のないものが一番いけない。

暮れの事である。ママさんと話しをしていたら、近くパスタはやめて蕎麦会席一本にするのだという。どうやら調理人であるご主人の意向らしい。

折角、美味しいパスタが石岡で食べられるなど喜んでいたのであったが、実は小生、糖尿病の持病があり、美味しいパスタはかなりのカロリーオーバーなのである。それで、よく香り蕎麦なる洋風の蕎麦を注文する。最近になって、芋煮

蕎麦を始めたというので、注文するのであるが何時も終わってしまったとか、予約で本日売り切れといわれ、まだ食してはいない。

女優の小林さんは、トマトとチーズのパスタが好きで、毎回それを注文する。パスタをやめて蕎麦会席料理だけになってしまうと、「ふらので昼飯をしよう」というと、二回に一回は「トンカツがいいな」とでも言われはしまいかと、内心ひやひやしているところである。

料理というのは演劇などと同じで、調理人の既成を打ち破る創造性がないと食べていて楽しさが半減する。創造性の味がしないものを喰わされるなら、ファミレスに行く方がましである。料理というのは、調理人の創造性を褒めることができるから会話が弾むのだろうと思っている。蕎麦会席とパスタでは仕込があまりにも違い大変さはあるだろうが、トンカツがいいな、といわれてしまいそうな哀れな小生のため、トマトとチーズのパスタは残してくれないだろうか、今年のギター文化館通いを心配している。ウツちゃん(店の看板ワンちゃん)、君からもマスターにお願いしてくれないか。じゃないと次に行った時、膝に抱っこしないぞ。

ギター文化館発「常世の国の恋物語百」第6回公演

なるたき

小林幸枝主演朗読舞劇・鳴滝にて...

野口喜広オカリナ・コンサート・風の声

= 2月17日(日曜日)午後1時半開場 午後2時開演 =

(入場料: 前売券2500円 当日券3000円)

前売チケットは、ギター文化館、ことば座事務局にて取り扱っております。

### 第一部 朗読舞劇「鳴滝にて…」

「私が神から与えられた天職はあなたを愛することです」

鳴滝を見上げて浮かんだ言葉が「天職」であった。その天職の言葉に、小林幸枝の舞をイメージしたとき「私の天職はあなたを愛することです」の恋物語が生まれた。兼平ちえこの常世の国の五百相を背景に、野口喜広の土笛(オカリナ)の風にのって、あなたを愛するという天職を舞う。

### 第二部 野口喜広オカリナ・コンサート

常世の国の風に吹かれて、霞ヶ浦を見下ろす高台の雑木林に移り住んできた土の風奏者、野口喜広が、自作「棚田の春」他、大地の声をウッド・ホールに聞かせます。

ことば座 〒315-0013 茨城県石岡市府中5-1-35

0299 24 2063

fax0299 23 0150

### 編集事務局

〒315-0001

石岡市石岡13979-2

TEL 0299-24-2063

(白井啓治方)